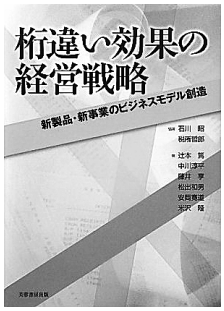
書　評



『桁違い効果の経営戦略』

石川　昭
税所哲郎　共著
芙蓉書房出版
2011年

小野瀬　由　一*

本書の主題である“桁違い効果”とは，「同じコストで成果を10倍以上にする」或いは「同じ水準，指標，条件等で，コストを10分の１以下にする」など劇的或いは抜本的な生産性の効果を意味している。

本書の共編著者である石川昭氏は，1994年４月２日に日経ホールで開催された「21世紀に生き残る新・経営手法―情報技術で不況を抜け出す，リエンジニアリング革命」と題する講演会及びパネルディスカッションにて，リエンジニアリング革命による“桁違い効果”の視座を既に提示していた。

リエンジニアリングが注目された1990年代は，世界的な政治・経済の大転換期でもあった。すなわち，1991年12月のソビエト連邦崩壊に伴い東側経済が西側経済に取り込まれる形でグローバリゼーションが展開する中，米国は名実共に唯一の超大国として「世界の警察」を自認し，米国中心の世界（パックス・アメリカーナ）を構築した。

しかし，米国経済の繁栄も長続きせず，2000年代に入ると，ITバブルの崩壊，ニューヨーク同時多発テロに端を発した対テロ戦争への突入，そして住宅バブル崩壊により世界金融危機の震源地となった。

一方，日本経済は1980年代後半のバブル成長を経て，1990年には米国に次ぐGDP世界第２位の経済大国に躍り出たが，10年後の2010年には呆気なく中国へその座を明け渡してしまった。また，IMDによる世界59カ国・地域を対象にした国際競争力調査によると，2010年の日本の競争力評価は27位とかつてトップクラスに君臨した時代の勢いは影を潜めた。そのうえ，2011年３月11日には，史上最大級の東日本大震災と国際原子力事象評価尺度（INES）レベル７（最も深刻）の福島第一原発事故という国難が日本を

＊　日本ナレッジ・マネジメント学会理事，拓殖大学商学部非常勤講師

襲った。

思い起こせば，第二次世界大戦に敗戦した日本は，裸一貫の再出発から持ち前の勤勉性と向上心を総動員して約50年で経済大国に成長した。しかし，今日の日本企業をめぐる経営環境は，国内市場が少子高齢化により縮小し，海外市場では台頭する中国や韓国との本格競争に突入している。

こうした中で，日本企業が国際的競争力を再生する道はあるのか。それは，地球規模のグローバリゼーションの視点を持ち，市場機能における自社の強み・弱みを再認識し単に自社の強みを伸ばすだけでなく，経営機能の劇的な“桁違い効果”を生み出すためのシステムと人材育成の再構築に他ならない。

折しも，東日本大震災の半年後に出版された本書では，気鋭の日本人研究者や実務家８人が世界中の“桁違い効果”による生産性向上の51ケースを調査分析すると共にその実現への道のりを導き出している。本書の特色は，利益最大化やコスト最小化の視点だけではなく，生産性と直接関連のある機能的側面，例えば，時間の短縮，速度の増加，能力の増大，感度の向上，精度の向上，効果・効率の増加，サイズの変更，新素材の発見等の側面を地球規模，国家，市場，企業経営の視点などで分類し，“桁違い効果”による生産性向上を実現するための道のりを多元的・多重的・複眼的に整理していることにあろう。

日本経済が未曽有の国難に遭遇している今，本書が，政府，企業，大学，NGO，NPO 等の管理者，研究者，構成員，学生等の各々が関わる分野の“再生への道しるべ”として必携の書になることを期待したい。

尚，本書は，World Scientific 社から，英語で翻訳出版される予定である。